

今の時代だからこそ、このアナログ的なアプローチが大事で、レ・コード館は、アナログ的なことを進めていくと良いのではないのでしょうか？

阿部 ある意味、先を歩きますよね。

司会 それは、昔懐かしいということだけではなく、そこから新しいものが生まれるということですか？

市川 今、忘れ去られていることを、たくさん発見できると思います。

阿部 確かに、色々なことをアナログ的な手法でアプローチすることも重要ですよ。『舞台図を手で書く』『照明の仕込図を手で書く』『台本を手で書く』など、一連の作業を、皆で話しながら進めるといふプロセスが大事なんだと思います。今は、何でもサイクルが早すぎてしまうので。

世の中は、どんどん進んでいるように感じるけれど、ご飯を食べるスピードが変わらないように、本質は変わっていないと思います。そういう意味で、今あるものを見直し、立ち返ることも必要なのだと思います。

道内の公共ホールとレ・コード館

司会 道内には、公共ホールが多数ありますが、その中でレ・コード館の印象を教えてください。

市川 レ・コード館は、「音楽のまちのレ・コード館」という印象が定着し、積極的な活動をしていると思います。

平成22年に文化財団の助成事業で関わった時ですが、その時、ジュニアジャズと地元劇団のメンバーが一緒

にダンスワークショップに参加しており、色々な文化サークルが活動していることに驚きました。



平成22年開催のダンスワークショップ

阿部 自分が新冠で驚いたことは、中学生や高校生がホールスタッフと舞台や音響、照明の作業をしていたことです。ステージは危険な場所なので、知識がなければステージに上がるべきではありませんが、研修を受け知識を習得した後に、一緒に作業することは、とても良い経験となるし、色々な可能性が生まれると思います。

例えば、楽器の演奏が得意ではない人も、裏方としてステージに関わることで、ステージマネージャーのスペシャリストが生まれるかもしれないし、照明家やステージ写真のカメラマンが生まれるかもしれない。

そういう可能性がある施設であり、ホールを熟知した専属スタッフもいるなど環境が整っていると思います。この様な施設は、ここ札幌にも無いですし、自分もこの様な場所で勉強したかったです。

坂本 これだけの施設であるレ・コード館も、道内ではまだまだ知らない人も多くいると思いますので、出張レコードコンサートを取り組みがもつと広がると、良いPRになるのではないかと思います。

また、レコード生産を始めた東洋化成や、有数の馬産地ということで中央競馬会などとネットワークを組むことも可能性があるのではないかと思います。単独では厳しいからこそ、ネットワークが必要だと思います。

市川 非常にお金がかかりますが、レコードが作れたらすごいですよ。レコードは、ホールの活用にも繋がりますね。コンサートを録音して記念レコードを作るとか、高校とかで部活を卒業する時、卒業記念演奏を町民ホールで行い、それでレコードを作ったら記念になりますね。

市川 難しいことだとは思いますが、実現したら凄いですし、そういう意味でも可能性がたくさんあると思います。

子どもが主役のレ・コード館

阿部 子どもが参加できる取り組みがもつとあると良いですよ。

子どもとオーディオ作りをしたら色々な発見があり、きつと、マニアックな子どもが出てきます。

そして、学校では活躍する場所が無いという子ども、もしかしたらレ・コード館では、すごい能力を発揮できたりすると思うので、そういった子どもの居場所にもなると思います。

地域における文化とは

ミホコ アメリカは、地域のコミュニティが強く、自分たちの文化を継承し次代に繋げようという意識が強くあります。

特に、南部の人たちは、ジャズは自分たちの文化だという思いが強く、その文化を大事にしています。

以前、バークリー音楽院の課外活動で、地元の指導者がその地域の子どもたちを集めてジャズを教えている姿を見ました。その地域で育った音楽家が、自分たちでその文化を引き継ごうとしている姿がありました。

阿部 「プラス」という有名な映画があります。イギリスでは全体で約6000の金管バンドがあり、各地域のコミュニティセンターでは、毎週バンドの日があり、家族と一緒に練習をしたりしています。

金管バンドが盛んになったのは、炭鉱労働者に楽器を与えたのがきっかけですが、それがいつしか地域に根付き、子どもから年配者まで、皆が関われる地域の文化に育っていきました。

ロンドン交響楽団の金管のレベルが高いのはこの地域文化があるためでしょうか。スターウォーズのテーマ曲は、ロンドン交響楽団が演奏していました。

道内における文化活動の先進地

市川 魅力ある文化発信をしているのは、士別市朝日町のあさひサンライズホールで、ここでは、住民参加型の芝居を軸に色々な取り組みをしています。

ほかにも、子どものレコードクラブとか、夏休みには、子どもガイドがいても良いと思います。

子どもがレコードを選曲するとなれば、お客さんに聴かせるために自分でじっくりと聴くようになりますし、子ども同士でレコードを批評しながら聴くようになれば面白いですよ。

ミホコ 出張レコードコンサートも、子どもたちが1930年代のジャズの解説をしたり、美空ひばりの曲を紹介していたら驚きですよ。

子どもが案内をすることで、親や地域との関わりも出てくると思いますし、子どもたちに接することで、そこに関わる大人や職員もレコードの価値を再発見できると思います。

レ・コード館の価値を見返す

阿部 レ・コード館には、本当にたくさん可能性があると思うので、地域の人や職員が施設をもっと愛し、可能性を探すことで、まだまだ広がっていくと思います。

レ・コード館のことをネット検索するとツイッターなどに、コメントが書いてあり、内容からすごく喜んで感激している様子が伝わってきます。

毎年の公演では、多くの人たちの出演機会を確保するため、出演回数を決めてキャストの入れ替えを行っていたり、学校の先生が芝居に参加し、その経験を学校での活動に生かしてもらおうという取り組みも行っていきます。

さらには、地元の人たちが協働で舞台美術の会社を設立し、札幌のプロの劇団から舞台美術の制作依頼を受けたこともありました。

サンライズホールも、レ・コード館と同様に開館から20年が経過していますが、この館長は開館する前からホールに携わっている人で、既に20数年勤務しています。公共ホールでは、とても珍しいことです。

特徴的な活動が認められて文化庁の表彰も受けていますが、何よりも、地域の人にとっても理解されています。

ここで開かれる公演も質の良いものが多く、道内で朝日町だけ公演があるということも珍しくありません。

質の高い公演を見ることが町民も刺激を受け、また、芝居の質が上がっていくというサイクルになっています。

阿部 そう考えると、結局は人なのでしょね。「文化だ、文化が必要だ」と言いながら、先を見ながら地域を束ねる人が必要なのではないですかね？

司会 新冠はまだまだ発展途上ですかね？

阿部 よく他の地区の成功事例を別の場所に持っていく、そのまま使おうとすることがありますが、ただ、真似をするだけでは何も生まれません。成熟していきません。

こういった自分たちが気づかない客観的な情報を見つけ、集めていくことで、レ・コード館の本当の価値を再認識できると思うし、20周年を迎えた今、もう一度、原点に立ち返り、これからの未来を創造することが大事だと思っています。

新冠だけにとどまらず、北海道の文化の発信拠点として、これからも進んでいって欲しいと思います。



「長時間にわたり、興味深いお話しをしていただきました」

「ご参加いただいた皆様、どうもありがとうございました。引き続き、レ・コード館をよろしく願います。」

次号では、町内の方々にお集まりいただいた座談会の様子を紹介しますので、どうぞお楽しみに。